

# 廣益俗說辨

十三 遺編

神祇 皇子 大子  
 士庶 公卿 近世

和書門			
九	二	四	一
函	架	冊	號
二	九	一	二
冊	架	函	號

內閣文庫			
九	二	四	一
函	架	冊	號
二	九	一	二
冊	架	函	號

內閣文庫	
番號	和 9241
冊數	21 ( 13 )
函號	212 70



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

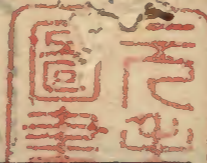


Kodak, 2007 TM. Kodak





克明館書



廣益俗說辨遺編廿六目錄

神祇

補

伊勢内外宮の説

補

伊勢二身浦社神鏡の説

補

天稚御子の説

補

天蓬每姫命の説

補

天子

補

皇山御出家の時侍内通河部晴成の説

補

崇徳院後松ヶ浦氏の説

皇子

克明館  
文庫印



信長新選補巻廿六巨額

補 二代の征西將軍宮乃院

公卿

補 菅丞相九月十三日此侍の院

補 在原行平因懐心の歌の院

士庶

補 大石山丸の院

補 相子お門練致の院

補 多田漢仲清原右左衛門忠信の院

補 源頼義箕輪入の院

補 義家忠明晴明の院

廣益俗統辨遺編卷廿六 井澤長秀輯録

神祇

補 伊勢内弁之院

俗統云伊勢内弁宮も一内弁の院内弁之号一

弁にわたり伊弁之号

今按るに意本因盛徴社主云く内宮弁之号

号しちりおの伊勢内風出記云度會郡宇治村

五十餘川上造地官社奉齋大社是日叙治

郷内也今以字活之二字為名認る古夏

記釋註云内宮號者宇治之本名也故就國地圖

谷本新選補巻廿六



古事類聚卷之六

七

取稱内宮也又云外宮則外者遠義也是天地開闢神坐故因遠號外宮若曰玄古之君肉之北

小治以て号しなり外宮へを以てしんて号し

考へるるを

補 倭鏡二見浦の神鏡の説

倭鏡云倭鏡玉二見北澳と岩と海に神代に神鏡

在り今按れは是は神鏡の鏡宮水神の事以てなり

今按れは是は神鏡の鏡宮水神の事以てなり

座 寶鏡鑄造功件神社之寶鏡二面依神託倭姫

命之御製也 神名畧記云神社在度會郡宇治 類聚神祇本

源神鏡篇云小朝熊神鏡二面大和姫命朝熊

海上奉鑄白銅鏡也 神名秘書云件神社之

寶鏡二面白銅鏡是也 一書云朝熊水神形石坐倭姫内親

當社矣 神名畧記云神社在度會郡宇治 類聚神祇本

坤方 坤方 坤方 坤方 坤方 坤方 坤方 坤方 坤方 坤方

西自 西自 西自 西自 西自 西自 西自 西自 西自 西自

湖濱 湖濱 湖濱 湖濱 湖濱 湖濱 湖濱 湖濱 湖濱 湖濱

度會 度會 度會 度會 度會 度會 度會 度會 度會 度會

佳神 佳神 佳神 佳神 佳神 佳神 佳神 佳神 佳神 佳神

云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云 云云

右參考 右參考 右參考 右參考 右參考 右參考 右參考 右參考 右參考 右參考











すす大推後より此くされて居る女ありとわら  
糸巻鳥の女子よわらざらば初べし又具沙門天の  
ざくどめつぎりて云ハ陀羅尼集より具沙門天  
令身被合甲而足踏女人之肩或云乃其母也といひ  
具沙門を母と謂ふ傳とわらりて天探女が事と  
と笑ふと云ふ事ありと云あり

天子

補 花の院御出家の時侍内道河傳時時院  
俗流云は海山家なりと云安倍時時河ありと云

卷の末て天孫なる天子位と云ありと云天孫あり  
と云はたごらるる事と云も内とれは夫皇より由らむと  
あるらるる事と云て安倍と云る人ありて云と云ふ  
時ゆは若くは若くして天女より云へて奏すありと  
云との事あり

とある小大境云ふ海寛和二年六月廿三日日  
見そくふ花の鳥よわらゆして海山家入りと云  
ひしと云十九又と云帝つらみと云らるる事  
と云ふ事ありと云は時ゆは家のおはらと云  
あへをみづらうの事と云ふ事ありと云と云



ころはかりよりどかりとせのよとんゆり天雲の  
 が清うがとそにかりにるるとんゆりか糸り  
 へ奏せし車にさうとくさせよとんゆりか糸り  
 あしんらんさりとともおん道よかかり終らんさわ  
 つとあしんらんさりとともおん道よかかり終らんさわ  
 いん後ハ信ノ実探よとんゆりか糸り終らんさわ  
 補 宗徳院瀧波松浦風の清秋の流  
 俗説云宗徳院瀧波よかかり終らんさわ  
 又神出河りて松乃松浦うあゆむとんゆりか糸り  
 てあかへ熱つとれ慰とんゆりか糸り終らんさわ

い浦の貝小松字浦字わらうとんゆり

今按るよい秋ハ宗徳帝ハ清秋よあむとんゆり中  
 納云定秋の秋かり後拾遺集云とんゆりか糸り  
 うり多る人よ清うとんゆりか糸り  
 うり多る人よ清うとんゆりか糸り  
 萬葉集云 作者 暇有者拾介將往住吉之岸因  
 云憲忘貝ハ二秋ハ混同して宗徳帝乃ゆり  
 とのやうとんゆり又貝ハ字河るとんゆりか糸り  
 い河波玉海色貝ハ符字わらうとんゆりか糸り  
 たりとんゆりか糸り

信濃縣志卷之六

十一











のお遠とどへー

從懐の親まの事。從は西海絶後よ  
載たりかんりくみんを  
○右懐島。墓下ハ。悟ら福され境比ちり。懐の事  
る不事。芳高の罪基まで。お守の建まらり

公卿

菅丞相九月十三夜此詩の宛

信光云九月十三夜の月似鏡無明罪より

少く九月十三夜の月似鏡無明罪より

物とほりありしり今の世より万中一と云ふ

と物に此より月光似鏡の物に九月十六日秋の

詩少く十三日秋の物よりわらうと菅家後集云秋の

九月十五日 黄茱顔色白霜頭况復千餘里外投昔

被榮華簪組縛今為貶謫州萊囚月光似鏡

無明罪風氣如刀不被愁隨見隨聞皆慘慄

此秋獨作我身殊とわらふんかへー從中右

記中梅門右  
大長宗忠云係延元年九月十三日今宵雲清月

明是寛平注自明月無雙之由被仰出又云

仍我朝以九月十三夜為明月之夜と有り寛平

注自と菅丞相同時代なり紙のてお遠とどへー

のがとへー

菅丞相平周懐の秋此宛

信光云菅丞相の詩よりわらうと云ふもの此宛



おけり松中よりうははしうりあんとよみ一因懐國  
にせよ老るよあふとをあらふつゝまがれをもなむい  
つそよめあかあり秋人のあなづる名おとあるとつふ  
おとくありをあらふ年此因懐さふかりりそよま  
よか一橋ゆきといふ人因懐ちよありしとあらぐて  
あやまりつゝもれなり

今接ふおひ流赤かり文徳實録云齊衡二年  
正月丙申從四位下在原朝臣行年為因幡守  
仍平家集云いかにあちかりしが任そそくまやこ  
のぼりつゝにいふ人あつてはるる

いかにあちりつゝ孫よけり松中一さうば今より  
あじとあり信統の作者もあつた書とあつた

士庶

補 大石山丸の経

信房流布のたをた日本朝敵のほよ大石山丸とあり  
ていうる者もあつた

とあつたに因史実源もよ大石山丸といふ者あり  
但日本紀云應神天皇第二の皇子よ大石山丸  
子入母いもとあつたなり應神天皇ホウの孫ミ道

大石山丸の経











今按るに公卿補任等の法実録は清和天皇  
お秋忠と云ふ者なりと後仲徳と云ふ者元統  
として掲げたりしものなりと云ふ源朝臣  
紀は西美光天皇の御時西海神の徳よりして流  
罪せられ多りしものなりと云ふ後仲と云ふ者  
流せられしものなりと云ふ又後仲と云ふ者  
乃教やうらふせんしものなりと云ふ後仲本  
して頼朝の御時後色徳を冠ししものなりと  
實表記は徳の平忠盛と云ふ者の家傳なりと  
云ふものなりと云ふ本朝の事一家人たる事  
則ち家傳

が度上の小庭は作せしと云ふは若くは  
とのたらし

**補** 源頼朝我孫子入るが教よりして判發せし

信光云信光は源朝臣系孫光女平西洞院より  
よりひ敏の向は我孫子と云ふ河原院より  
其孫入るはと云ふ道世乃士の達立なりは  
乃孫らるるは平朝臣信光は敏よりして  
乃孫らるるは平朝臣信光は敏よりして  
乃孫らるるは平朝臣信光は敏よりして  
乃孫らるるは平朝臣信光は敏よりして

今按るに信光は平朝臣信光は敏よりして







四年十二月四日ノ薨せり  
 長曆二年に我皇生れり  
 又寂と義家出まの三十一  
 遠せり  
 尚書其所知為嶺南節度獲一橘其大如升將  
 表獻之監軍中使以為非常物不可輕進因取鍼  
 刺其葉乃有蠕々而動者因破之中有一小赤蛇  
 長數寸とありは後と見ふ此事を附含せりとの  
 なるじ

廣益俗說辨遺編卷廿六 終

廣益俗說辨遺編廿七目錄

士庶

補

鎌田善房改法と忠臣といふ説

補

甲斐三郎兼家比叡廻の説

補

愛媛若名が説

補

松徳丸が説

補

山本玄史の説

近世

補

果子のむとじ侍達り説



廣益俗說辨遺編卷廿七

廣益俗說辨遺編卷廿七

士庶

補 強國之流 政清の志 居といふ 統

俗易流布此書に強國之氣 政清の志をて 志居と稱せり

今按るに強國が志 義のついで 志居と稱せり 志居と稱せり

よりと云ふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ

志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ

志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ

志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ

志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ 志居といふ

私軍より











頼朝廷又仕へて曾若かり男子三人あり嫡男  
皇内若弟重敏次男隆務次弟貞頼三男の月  
二弟重家とよりゆるよあ授ふるお山は賊  
ありて旅客とあびやうは右追伐とてさ旨を執  
て重頼貞頼重家とてお山は左向とて御中兼  
家武勇後備たりとて進で強我を討賊後  
ふあ津伐と全兄重家貞頼彼武功を精と深  
答よつとさあし我の名なりと養してさ分の  
忠賞と揚りお弟の信法と改め次弟の信法と  
改むとさふ重家定と隔りて大よ傷と息とてよ

終るといへたおらうらうて獲りお智若乃方  
あて療書を加へ中後せうは漸く私宅よ之  
かたわると全兄等これとてゆくおなく趣電  
と重家友人が領知とあをせて武威ましく強  
大なりお平の申おるお門が謀及乃とて勅令  
よよめて東國ト向一軍功他よ趣一右近に  
兵の内甲が突郡とたまをりて居修一甲突をいさ  
と改むは又修修中國公賜り子兼依お具よ  
在機とていさ重家同兵お郡一兵貞親も  
答よをとるへつりけ流流とてさいめんら



補 愛護若か院

活流云むう二条義人といふ人の子と云ふ積ありと  
 といふ人あり継母これに慕ふ一文と云ふり  
 ども取引せざるを徳言して愛護と遊出  
 び愛護が叔父敵らみありしに頼りてあつた子  
 の有りしは叔父の傍ありしみてわんざりしは愛護  
 せんといふくしてさつさうが勝は勇と投て死せり至  
 其山王権現とありてふと云

今あるふけ流の秋夜を物語りよめて流ありし  
 事かたりを物語云は堀河院の御宇西山の瞻

西上人のいふ嵐東塔の在徳純孝院宰相持  
 師教戒としり教戒いさうつらひゆりてふ  
 と出で地は伝人と云うるがすうが聖王の結縁  
 と云ふがうく同院同侶のといれと名あはれく  
 てありしうしあるがあらはれぬよ七日このりて  
 遊楽と云ふ夜は夜よといふ人といふてあはれいと  
 せびうれわりのじよ二舟寺の道ありてあはひ  
 て愛護流の池房に在りたりと云ふる  
 ころふ二八むりの夜が人といふはまはれりてうと  
 み居りて是は二条義人といふは死にたは



孫の御遺言

つ子梅若くしやあせをりある律師が最よ見  
るお色くげよとじとたつとひびくおひ  
ゆさつつかあか人れはくろる童とがしうい  
りきればか人まをとりを律師をす祿ふ  
一紙わいりこれらと後律師おまふりて  
程垂幕のこ強やまじぬあづみてあしく  
らざり梅あけしとまてあ人えらへあか  
らるん訟返してとういあいたしあぬあ  
ととたげ祿ゆじとあひたら童一人とが  
あられとあもあられぬよつらもて  
あられとあもあられぬよつらもて

かげは屋らういあられ天物ごまかりと  
ととのては殿くわのがさうかどさ  
たけうら心依きてつらとあくうなひゆさぬ  
梅あうせうりさく山三井ちまよさうだ  
後兼戒律師以下妙き獄より礼進入り  
火とけてやさういぬと後梅あゆり  
どと我らあ小佛園全火災は権りし  
しみ泣く文と童よのてて律師つ  
しぬ田の橋の下より身を投てし  
師まといありえらるれ骸と  
あられとあられぬよつらもて

孫の御遺言

〇二







実てりかゝと天正も小として七日の施りせむと下じ  
は延年次ら九もよまひりて来りしと信徳もこらみあ  
とがらし

今按ふは元ハ弱法師と云信徳ハ河内水も安里  
な事ハ耐通後と云若の子春徳丸と云はる若乃  
澄よりりて遊歩のりガ不役よあひ天正もよまて一  
七日施り成りせむとあふ弱法師と云るを馬人  
身ハ通後りてと問答してと云るよま徳丸ハ  
元ハ河内水も安里よつ通入まると云ふりけは元  
よつてはるりくるものかり

山庄寺の鏡 山考一説山椒と書

俗説ハ山庄寺といふ老此事代より あまのく人のありと云事  
が山庄寺といふと云事  
今按ふは信実録よんくんとと云ふと云事  
ハ事ありしやと云ふ貝原翁法外廻紀云丹後  
栗田村 栗田村ハ一里  
遠もよわる事 ありより西一里むりり栗田嶺  
或号 或号  
云 山上よまは津和と田名飲の境あり七曲八嶺と  
てらちをいふ嶮難の坂路又十町と傳て由良港  
よ出ると云るよ俗よ山椒を更が子三郎が墓  
田考三府志云山椒を更が墓なり  
墓乃よと云と云事 海色よ遊小溪かどいふあり  
申らばまはるりむ里二十町あり民部三言傳



佐渡縣遠編廿七

石浦 はらの四ツり とし はの 山椒 シロネ 文 コクダシ 屋敷 カキ 松 マツ 松

て石の水が孫あり中 ミ 心 ココロ とし はの 山椒 シロネ 文 コクダシ 屋敷 カキ 松 マツ 松

田志府志云わに村のふもちとあり 今小峯 コタケ 文 コクダシ 屋敷 カキ 松 マツ 松

田志府志は山椒をより事と様しくあるなり目なり脚集 文 コクダシ 屋敷 カキ 松 マツ 松

近世

補 菓子とわとし侍童 ウラハ が洗 ワシ わの人の物洗と定て評とらるる人も世と

俗流 ウラハ 云中 ウラハ ざり ウラハ あり ウラハ 人 ウラハ 姓名未詳 冠 ウラハ 文 ウラハ とわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

男 オトコ 志 シ 慕 ム しく ウラハ 教 ウラハ 通 ウラハ の ウラハ 文 ウラハ とわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

とん ウラハ しく ウラハ 志 ウラハ 慕 ウラハ しく ウラハ 教 ウラハ 通 ウラハ の ウラハ 文 ウラハ とわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

侍童 ウラハ 文 ウラハ とわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

文 ウラハ とわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

とわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童

此れとわとし侍童 ウラハ 此れとわとし侍童



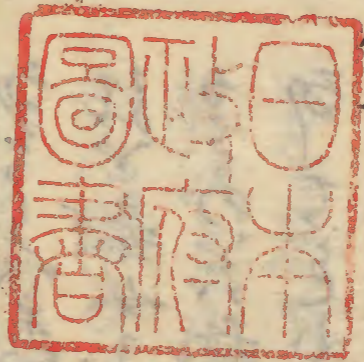




克明館藏書

廣益俗說辨遺編卷廿七

終



克明館  
文庫印



